



THE TOP OF DESIRE

カスタムという
官能世界。

昨今のカスタムシーンにおいてSUVは、間違いなくメインストリームの一翼を担う存在だ。巨大なボディは極上のキャンバスとなり、あらゆるモディファイを見事にモノにしてしまう。ここでは世界で猛威を振るう最新のカスタマイズドSUVの姿を追い、その深遠なる官能世界に足を踏み入れてみたい。



覚醒する

野生。

たった数年で「世界一のトップブランドへ躍り出たマンソリーは、「世界でたった一台自分だけのオリジナル」を提供しよう」と世界有数のラグジュアリーカーを取り扱うカスタマイザーである。今回とりわけ力を注ぐプレミアムSUVの中の注目株にして、日本初上陸となったレンジローバースポーツをキャッチした。

MANSORY SWISS
RANGE ROVER
SPORT

REPORT ● 中三川大地 (Nakagawa Taichi)
PHOTO ● 上野由日哉 (Yoshihiro Ueno)

自分だけの一台を手にしたというカスタムを標榜する人にとって、最近、異なっただけでなく、異なる世界がある。コンプライアカーという世界は今に始まったものでもないのに、コイツは今までの格段に存在感の違いを見せる。コウロシュ・マンソリー氏が率いるマンソリーというブランド、はつきり言ってしまうと、カスタムじゃない。

ドイツ南東部バイエルン州の小さな田舎町マンントを本拠とするマンソリーは、世界でもっとも豪華で華やかなクルマ造りを信じてきた。ベントレーカスタムで世界に打って出たのは周知の通り。以来、瞬く間に車種を拡大し、世界のメジャーモーターショーでは常設展示場である。簡単に列記するだけでも、祖となるベントレー、アストンマーティンに加え、ロールス・ロイス、ブガッティ、フェラーリなどの、スーパーGT系からマセラティ、メルセデス、BMWなども自邸に集めてきた。

彼らの動きで注目すべきは、2007年11月にスイス・チューリッヒにあるリンスビードのボルシェ・チューニング部門を傘下におさめたこと。ドイツでの活動と歩みを共にしてマンソリー・スイスとして発動した彼らは、リンスビードが持ついたボルシェ・チューニングをさらに昇華させるのと同じく、プレミアムSUVにも手を伸ばした。ボルシェをカスタムして楽しむユーザーの多くは別にSUVも所有していて、彼らの元へSUVへの進出を促す声が多く集まったのだという。

現在、マンソリー・スイスがボルシェの他にレンジローバー、BMWを扱い、マンソリーがそれ以外のブランドを手がけるといふふうに整理されている。既に日本でもマンソリー・スイスのカイエンが定着しつつある。そしてこの度、日本初登場と相成ったプロダクトをキャッチした。品質の通り、威風堂々という言葉を相応しいマンソリー・スイス製のレンジローバースポーツである。

既に昨年の段階で、ウェブ上のフォトデビューを果たしていたが、改めて目の当たりにすると、その迫力に、存在感に、そして細部に宿るクオリティの高さに言葉を失ってしまう。独特の風合いを持つカーボンパーツで構成されたマテリアル類、オーバーフェンダーを追加した上でそこに自然と収まる23インチホイール、すべてがマンソリーの世界には海を越えてきている。

最大の個性は、彼らの得意技たる





MANSORY SWISS RANGE ROVER SPORT



フロントグリルのスポイラーとサイドスカート、それをつなげる過激なオーバーフェンダー、ボンネット等、外装はフルコンプリートの状態が確認される。カーボン製のブラックの塗装に漆喰で、迫力を醸し出している。中にはカーボン製地を敷いて塗装する「見える裏」も知らず人も存在する。ホイールは「M10」で1ピース23インチとなる。この車はスペースを効率的に使うことで最適なバランスをつくり上げた。なお、プレーンキャリアーもシルバーにペイントされ、さらに「Mansory Swiss」のロゴが入っている。タイヤはダンロップ「SP SPORT MAXX」だ。



が持つ、英国流SUVの世界をよく理解しているようだ。彼はそして、その固有の世界を決して否定せずに自らのアイデンティティを思いっきり注ぎ込んだ。そんな印象を持った例えはこれだけたくさん個性を振りまくパーツが付いているのに、ひと目見ただけでレンジローパーだとわかるのが巧い。普段はあくまでシエントルに振る舞い、だが夜の間に溶け込ませると牙をむくようなオフティカル・チューニングなんて、見事としか言いようがない。

この個体は、厳密に言うと本國で製作されたコンプリートカーではなく、日本仕様のモデルにマンソリー・スイスから輸入したパーツを組み合わせて仕上げたもの。昨今はコンプリートカーのみならず、インポーターの尽力も手伝ってパーツ単体での供給も積極的だ。今まで高値の花と門前払いしていた人も、パーツ単体から楽しめるようになったことは素直に歓迎したい。この個体に関しては、外装はフルコンプリートとはほぼ同じ状態にまで到達させている。オーバーフェンダー+23インチ化に伴う最適なトレッド幅を実現す

るために、入念なセッティングと走行テストが繰り返されたという。この強烈な迫力には、日本の技術も注ぎ込まれているのである。

さて、マンソリーのもうひとつの個性といえはインテリアメイクだ。だが、これを味わうには本國製作という壁が立ち上がるがゆえ、インテリアはほぼノーマルのままだったが、日本の路上で不便のないよう、選んだインテリアに身を置くこと、逆にこの外観の強烈な個性とのギャッ

は言うまでもない。こうして生まれただライカーボンのボディパーツ類は、なるほどどこを取っても一糸乱れぬカーボン繊維の編み目や折り返しと、艶艶を放つような輝きがある。ハイウエイで300km/hドライブでもビクともしないような強靭な作りを持っている。

とここで、コウロシユ・マンソリーはもともと英國車が大好きな男だからなのか、4WD世界のロールス・ロイスとも呼ばれるレンジローパー

カーボンだろう。多品種少量生産が彼らの常だから、自社でカーボンファイバー工場を持つほどだ。チェコにあるそれは、大型のオートクレーブで常に繊細かつ高品質なカーボンパーツを焼き上げている。

と、同時に自動車メーカーさながらのCAD/CAMを使用した開発がおこなわれる。もちろん、コウロシユ・マンソリーを筆頭とする開発陣らの研ぎ澄まされた感性や、成形に長けた職人芸が必要不可欠なこと



レンジの世界を尊重した強烈な迫力 そこにマンソリー哲学が宿る。

力は、少なくとも日本において、は希少な存在であることに間違いはない。奥ゆかしさを美徳とする日本人に、強烈なカウンスターパンチを食らわせるようなマンソリー・スイスとレンジローパー・スポーツとのコラボレーションは、見ているだけで、気持ち晴れやかになるほどロマンチックで、そして繊細だった。

プがいいと感じた。矯正とはいえず、スズキは、最上級に位置するオートバイオクラーフイスポーツだ。ツートーンで構築されるパフォーマンス・レッド・プレミアムレザーの質感は、オーナーを常に満足させるはずだ。動力性能に關してもまた然り。本國には絶頂的な過給器やECUチューニングが存在するが、この5.0 & V8スーパーチャージドは、既に510PSとSUVにしては異様なほどの出力を持つ。それも極めてト貴な鋼を備えている。レンジローパーのセッティングを調整すれば、むしろこの状態のほうが快適できるというもの。ヘタなチューニングをしたがために視野が狭くなるのは無稽としか言いようがない。

マンソリーの哲学は、間違いなく、強の人と強う自分だけの1台、強さを言うこと世界に1台だけの存在を誇りに上げることにある。今では各地に認められて世界の高級車市場で多数の購買層を持つことになり、さすがに世界に1台だけとはいかないのかもしれない。だが、「1」の強烈な迫



-Equipment-

- Mansory Front Spoiler
- Mansory Over Fender
- Mansory Side Skirt
- Mansory Rear Skirt
- Mansory Trunk Lid
- Mansory Rear Muffler with Chrome Cutter
- Mansory Engine Hood
- Mansory Front Grille
- Mansory Side Air Duct
- Mansory Roof Spoiler
- Mansory M-10/1 MonoBlock(F&R: 10.0Jx23inch)
- Brake Caliper Paint

THE
TOP OF
DESIRE
カスタムという
官能世界。